

イギリス詩の研究

圓月勝博

W. B. イェイツ, T. S. エリオット, R. S. トマスなどのイギリス詩人と対話しながら、ノーベル賞受賞以降の大江健三郎は、「レイト・ワーク (晩年の仕事)」の意味を執拗に問い続けている。近年の大学では、若手研究者の奨励がしばしば話題になるが、成熟した研究者が果たすべき役割にも目を向けておかなければ、学問の世界に順調に足を踏み入れたとしても、自分の歩むべき道を見失ってしまうことになるであろう。本年度のイギリス詩の研究成果には、「レイト・ワーク」について考え直させてくれる著作が多かったので、まず、その代表的な業績に目を向けるところから、今回の回顧と展望を始めてみたい。

筆頭に取り上げるべき著作は、大江とほぼ同世代である玉泉八州男の『北のヴィーナス——イギリス中世・ルネサンス文学管見』(研究社, 2013.8)である。イギリス文学を広く深く涉猟し続けた碩学の論文集であり、思い出の文章を再録した巻頭論文を除いて、すべて初出の文章ばかりである。たとえば、「ルネサンスの夜啼鳥——その政治性と限界」は、古代ギリシャのホメロスから筆を起し、中世のジェフリー・チョーサーなどに目配りをした後、ルネサンスのサー・フィリップ・シドニーとエドモンド・スペンサーなどをめぐって、フィロメラ伝説の政治性を論じ尽くし、ジョン・ダンやジョン・ミルトンを境にイギリス詩が変質したことを示唆した上で、最後にマシュー・アーノルド、アルジャノン・スウィンバーン、そして、エリオットの名前に触れて、論を閉じるという壮大な構想のもとに成立している。豊かな読書量と確かな学問的訓練に裏打ちされていない文学研究などに意味はない、と言わんばかりの著者の一言一句には、生涯現役を貫くことを決意した一流の学者だけが持つ峻烈な気迫があり、襟を正して脱帽するしかない。

しかし、「レイト・ワーク」には、生涯現役型とは対照的な後継者育成型とでも呼ぶべきスタイルもある。次代の研究者の登場を促すために、見識と経験を活かして、学問の裾野を広げることを目的とする仕事である。まず、本邦のスペンサー研究を長年にわたって牽引してきた著者に対する敬意を込めつつ、本年度「レイト・ワーク」アイデア賞として、福田昇八編訳『「妖精の女王」名場面』(文芸社, 2013.12)を紹介しておこう。『妖精の女王』がイギリス詩の中で最も魅惑的な大傑作であることは、知る人ぞ知るところだが、3万5千行に及ぶ壮大さが災いして、大多数の現代読者には敬して遠ざけられてきた。そこで、鍛え上げた眼力で74の名場面を選び出し、日本語訳と解説を付して一冊の文庫本にして、幅広い読者にその醍醐味を簡便に紹介しようと

回顧と展望

というのが福田の奇書のねらいなのである。さらに、昨年の本欄でも既に触れた岩崎宗治訳『英国ルネサンス恋愛ソネット集』（岩波書店、2013.9）、野上憲男訳『S. T. コールリッジ詩歌集（全）』（大阪教育図書、2014. 1）、中岡洋訳『パトリック・ブロンテ著作集』（彩流社、2013.1）と『ブランウェル・ブロンテ全詩集（全2巻）』（彩流社、2013.9）、坂本完春・杉野徹・村田辰夫・薬師川虹一訳のシェイマス・ヒーニー『人間の鎖』（国文社、2014.1）などの訳書も、後継者育成型「レイト・ワーク」に加えてよいだろう。初学者にとって、信頼できる先学の手になる翻訳ほど、確かな導き手となるものはないからである。

生涯現役型と後継者育成型の中間には、研究生活の有終の美を飾ることを目的とした集大成型もある。田中晋『詩人スペンサーのこころ』（開文社出版、2013.11）は、著者が誠実に積み上げてきた研究成果を踏まえて、ルネサンス詩人スペンサーの全体像を描こうとする端正な研究書である。小泉義男『ミルトンとクロムウェル』（山口書店、2013.4）、田中宏『ワーズワスの研究—from Love of Nature to Love of Man』（大阪教育図書、2013.9）、山田豊『ワーズワスとコールリッジ——詩的対話十年の足跡』（音羽書房鶴見書店、2013.5）なども、集大成型に分類すべき本年の出版物と呼べるであろう。スペンサーを筆頭に、ジョン・ミルトン、ウィリアム・ワーズワス、サミュエル・テイラー・コウルリッジなどイギリス詩の巨星の名前がずらりと並ぶ。作品が質量ともに充実しており、多彩な先行研究も汗牛充棟である大詩人は、一朝一夕では全貌をつかむことなどできないので、その研究者も必然的に大器晩成となることが多い。雑音に惑わされることなく、流行に左右されない研究対象に取り組み続けた著者の気骨には、然るべき敬意が払われて当然であろう。

他方、良きにつけ悪しきにつけ、流行には一切無縁とばかりは言っていられないのが現役研究者の定めである。その動向を調べるために、学会誌や紀要等にできるかぎり目を通したところ、研究業績に偏りがあることに気がついた。ロマン派以前の詩の研究成果が相対的に少ないのである。現代社会の要請に明快に応える成果を発信することが文学研究者にも強く求められる近年の実情を反映して、若手研究者の関心が新しい時代に移動していく傾向に歯止めがかからない。

そのような風潮に抗って、初期近代詩研究も健在であることを示してみせた十七世紀英文学会編『十七世紀英文学における終わりと始まり』（金星堂、2013.6）は、本年度の敢闘賞の有力候補と言えるかもしれない。書名をみただけでは、全体的テーマが判然としない点は、投稿者の間口を広げるための編集上の苦肉の策だろうが、論集としての統一感の不足に対する不満を相殺して余りある充実した論考が勢ぞろいした。ジョン・ダンの『魂の遍歴』に挑戦した友田奈津子、石井正之助が築き上げたロバート・ヘリック研究の輝かしい伝統を受け継ぐ古河美喜子、ヘンリー・ヴォーン研究に軸足を定めて進境著しい松本舞などの若手会員の澆刺たる論文の後には、ジョージ・

イギリス詩の研究

チャップマンの最初期の詩『夜の暗黒』を明快に腑分けしてみせる岡村真紀子、アンドルー・マーヴェルの抒情詩を自家薬籠中のものとする植月恵一郎と吉村伸夫などの古参会員の円熟した文章が続く。近年、イギリス詩研究の分野では、大半の関連学会が会員数の頭打ちなどで運営に呻吟しているが、世代を超えた研究者が一堂に会する上記論集のような貴重な成果を見ると、学会の存在理由をあらためて認識することができる。

ロマン派研究強し。これが学会活動と研究成果の相関関係という点から見た本年度の特徴である。大学の授業で詩を取り上げることが難しくなってきたが、ロマン派詩人だけは、いつも学生に一定の人気がある。研究者人口もイギリス詩の分野の中では一番多いのではないか。何よりも学会を牽引する中堅研究者の層が厚い。たとえば、David Vallins, Kaz Oishi, and Seamus Perry, eds., *Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations* (London: Bloomsbury, 2013.8) には、編者に名を連ねる大石和欣を筆頭に、和氣(直田)節子と勝山久里という気鋭の中堅研究者が違意の英語で書かれた論文を寄稿しており、ことあるごとにオリエンタリズムを取り上げてきた近年のイギリス・ロマン派学会周辺の研究成果の海外発信役の大任を見事に果たしている。また、「日本から発信する欧文学術誌」を標榜する *Poetica* 第18号(雄松堂出版, 2013 春)においては、Digital Romanticisms という斬新な特集の趣旨に適切に応じて、和田綾子と園田暁子がウィリアム・ブレイクとデジタル文化の接点を探る英語論文を公表している。伝統的な文学研究の領域では、『東北英文学研究』第4号(2014.1)の中で、樋渡さゆりがワーズワスの“I wandered lonely as a cloud”を取りあげて、汲み尽くされることのない味わいを持つ名詩の中の名詩の精読を明晰な日本語で展開している。中堅実力者がこれだけ奮闘すれば、その分野全体の底上げも必至で、『イギリス・ロマン派研究』第38号(イギリス・ロマン派学会, 2014.3)には、ウィリアム・ハズリットを合わせ鏡にしながらジョン・キーツを論じた伊藤健一郎と、「サンクチュアリ」という言葉を手がかりに同じくキーツを論じた金澤良子が揃い踏みし、石田久・服部典之編『移動する英米文学』(英宝社, 2013.12)に収録された村井美代子のキーツのソネット論や、息の長い同人誌『アレーティア』第28号(アレーティア文学研究会, 2013.12)に掲載された高橋雄四郎のキーツの妖精論と補い合って、キーツ研究が一気に百花繚乱となった。上記の論集『移動する英米文学』では、コウルリッジと社会進化論の関係を考察した中村仁紀論文が力作だが、関西の若手の俊英が先鋭な論考を公表する一方で、東京コウルリッジ研究会がコウルリッジの『文学的自叙伝』(法政大学出版局, 2013.5)の新訳を完成させている。世代や地域や役割分担のバランスが実に良く、ロマン派研究の将来には、希望を託してもよさそうだ。

ロマン派研究ほどの賑わいはなくても、堅実な学会活動が展開されているところからは、着実に研究成果が発信されている。『北海道英語英文学研究』(日本英文学会北

回顧と展望

海道支部, 2014.1)に掲載された19世紀イギリス女性詩人に関する滝口智子の目配り
良い日本語論文や、『九州英文学研究』(日本英文学会九州支部, 2014.1)に掲載された
エリザベス・バレット・ブラウニングに関する浜本裕美の意欲的な英語論文がともに
日本英文学会支部大会における研究発表に基づいていることを考えると, 日本英文学
会支部体制の効用をあらためて確認することができるだろう。個別学会の存在感も侮
れない。たとえば, ジェラード・マンリー・ホブキンズのような大衆受けとは縁のな
い孤高の詩人に関しても、『英文学評論』第86集(京都大学大学院人間・環境学研究
科英語部会, 2014.2)の桂山康司論文、『英米文学英語学論集』第3号(関西大学英米
文学英語学会, 2014.3)の高橋美帆論文、『アカデミア』文学・語学編第94号(南山大
学, 2013.6)の山田泰広論文などの研究成果が着実に積み上げられている一つの理由と
して, ホブキンズ関連学会の活動が地道に続けられていることが挙げられるであろう。
イエイツ研究についても同じことが言えるようで, *Reading* 第34号(東京大学大学院
英文学研究会, 2013.12)に英語論文と日本語論文2本を一気に寄稿する元気一杯の柿
原妙子や, *Albion* 復刊第59号(2013.10)に意欲的な論考を発表した西谷茉莉子など,
将来が楽しみな新進気鋭の研究者が台頭してきている背後には, 後継者育成に熱心な
学会の存在がある。T. S. *Eliot Review* 第24号(日本T. S. エリオット協会, 2013.11)
に達意の英語論文を寄稿し, 念願の『四つの四重奏』論を完結させた山口敦子は, 前
年度の同誌に発表した先行論文によって, 2014年度カトリック学術奨励金奨励賞を受
賞しており, 優れた成果と栄えある名誉によって, 学会誌運営の苦労が無駄ではない
ことを証明してくれている。

若手の活躍に奮起して, 中元初美が『現代英詩を読む——エリオット, オウエン,
ラーキンの作品を中心に』(溪水社, 2013.10)を公刊し, 長年のエリオット研究の新た
な展開を示した。第一次世界大戦開戦100周年にあたる本年度, 戦争詩人ウィルフレド
・オウエンについての信頼できる邦文文献が増えたことを特に歓迎したい。中元と
示し合わせたかのように, キーツ研究者として名高い伊木和子は, キーツの伝記でも
有名な前桂冠詩人アンドルー・モーションが第一次世界大戦からアフガニスタン戦争
に至る現代社会の戦争を主題にして書き上げた最新詩集『税関』(音羽書房鶴見書店,
2013.7)の翻訳を早くも完成させている。史上初めて終身制を事前に断って桂冠詩人に
就任したモーションが10年の任期を無事に終えた後, 桂冠詩人の地位を襲ったキャロ
ル・アン・ダフィは, スコットランド人, 女性, 同性愛者という桂冠詩人史上前代未
聞の初物尽くしで話題を呼んだが, 第一次世界大戦の記憶について, モーションに優
るとも劣らない問題意識を持って, 彼女もまた優れた詩を書いていることを『英文学
研究』第90巻(日本英文学会, 2013.12)の霜鳥慶邦による若々しい論考から学んだ。
若手研究者が公表する新たな成果の見識ある読者になることも, 「レイト・ワーク」に
向かって進み出す成熟した研究者の役割の一つであろう。(同志社大学教授)